

## — 論 說 —

## 初期M・シェーラーの「心情」の倫理学

五十嵐 靖 彦

マックス・シェーラーは、学位論文『論理的原理と倫理的原理との関係の確定のための寄与』<sup>(1)</sup>をもって、彼の哲学的思索の出発をなした。この論文はシェーラーの哲学的方向を定めた記念碑的位置を占めていると言ってもいいであろう。彼は、師オイケンの影響の下、ヨードル、ヴィンデルバントの倫理学史、哲学史を下敷きにしつつ、当代一流の論理学者シグワルトの意志優位説と正面から対決している。そして自らの思想を、「心情」を根本概念とする非合理主義的倫理学の構想として結実させているのである。

われわれは、本稿でシェーラー哲学の原型が奈辺にあるかを明瞭に示していると思われる、この学位論文を素材として、彼の問題関心の特質とその解決の試みの跡を辿ってみることにしよう。

## —

表題の示す如く、若きシェーラーは、規範学相互の関係づけという問題を、時代の学問界の愁眉の課題と受け取っている。すなわち論理学、倫理学、美学のそれぞれの領域の原理の間にはいかなる相異と関連があるか、を確定するという問題に自らの哲学的課題を設定しているのである。かかる問題意識の背景には、以下の如き彼の時代把握がひかえている。

彼は一方では哲学的学問に心理学主義がしのびこむことによって、規範学の本来の姿が解消されんとしていることへの危機感を抱いている。魂の統一的な諸能力が分解し、緊密に有機化された構造を失い、単なる「経過」Vorgängenや「生起する事象」Ereignissenの総和として取り扱われるに至った経緯について「序論」は語っている。更

に、この事態を方法論的原理から顧みて、進化論に触発された因果論的方法による目的論的方法の駆逐、もしくは、目的概念の歪曲という風潮だ、と指摘する箇所も本文中に見い出すことができる。目的は価値と結びついており、価値は決して事実として科学的・心理学的には説明され得ない、というのがシェーラーの見解なのである。この点に關しては、彼は新カント派を繼承する。しかし同時に、その枠を踏み出てもいる。というのは、右と同じ文脈で、科学的世界觀に対応する認識論において、意志や感情から認識器官たる悟性を純化せんとする試みが続けられてきたことを、「悲劇」とみなすのもシェーラーだからである。即ちシェーラーにとって、道徳法則の基礎づけの問題は、学問的な理論的認識の課題ではなく、意志や感情と結びついた「生」に即した問題なのである。ここに、非合理主義に結びつく契機を見い出すことができる。が、さし当っては、この学位論文の主題をより限定つけている、今一つのシェーラーの問題意識を指摘しよう。

彼は、他方において、最近の規範学そのものの問題設定の仕方にも大いに不満を禁じえないのである。ロツツエ、シグワルト、ヴント、フエヒナー、ヘルムホルツ等の諸研究は個別的成果としては、それなりに有益なものを含んでいると見なし得る。しかし、「個々の規範学問の關係を確定する」という課題は、少くとも我々の知る限りは、甚だしく等閑視された<sup>(3)</sup>結果、三つの分離した規範学の指示に順応せんとする一箇の人間の統一性が脅かされるに至っている。シェーラーはこ

こに「人間のエートスにとつての恐るべき分裂<sup>(4)</sup>」をみている。

以上の二側面から学位論文の主題が浮かび上がってくる。彼の関心は、一箇の人間の意識において、「目的」や「価値」概念の諸相が如何に關連し合っているか、知・情・意の統一的活動、真・善・美の三理想はいかに理解されるべきか、それらにあらじめ調和を前提するオプチュニズムは許されるか、等々、総じて彼の言葉に従えば、「価値意識の批判<sup>(5)</sup>」という課題のうちにあった。これは、確かに批判主義の伝統に立つことを示すものではあるが、同時に、理性に基盤を置く、普遍的な合法性としての倫理学には決して満足していないことをも示している。倫理的リゴリズムスは、結局は思惟が行為の善惡を規定するとみなす。が、シェーラーにとって、行為においては思惟ではなく、むしろ意欲や感情が先ずもって問題となるのであり、従つて倫理的に有意義的な現象とは感情生活のうちにこそ求めらるべきものだったのである。シェーラーは、道徳法則の普遍的・必然的妥当性は、確かに断じて無意味なものではないが、専ら普遍に留まるものであり、全く別の角度から補完せざるを得ないとみなしているのである。その角度とは、カント的な実践理性を理性とは「別様の精神の出来事<sup>(6)</sup>」即ち、「心情」と捉え替える観点である。かくてシェーラーの批判主義は、理性批判ではなく感情批判という独自の方向をとることになる。

学位論文は、この課題全体の重要な一部をなしている。三つの規範学相互の關係を確定し、人間の精神を統一にもたらそうとする場合、

三様の迫り方をしなければ完全とは言えまい。しかし、ここでシェーラーがなそうとするのは、「われわれは、倫理的な価値体系と論理的な価値体系との関係を詳細に考察することによって、この課題のための準備作業にとつていささかの寄与をなす研究をなそうとする」<sup>(7)</sup>とある如く、論理と倫理の両原理を剔抉し、倫理学固有の領域を確立することにある。この課題への解答として提出されたものこそ、「心情」を「根本概念」<sup>(8)</sup>とする倫理学の構想にはかならない。彼は、合理的倫理学を放棄し、行為の倫理性を心情に求める非合理主義への道をとつたのである。

この自らの立場を表明するに当り、彼は周到な論文形式を踏む。前半で、哲学史のうちに、論理と倫理との両原理の対立と調停の歩みの跡を探り出し、いまだ不十分な所以を説き進め、しかる後、後半「体系的部分」において、シグワルトの意志優位説を批判的に検討することを手懸りとして、彼自身の考え方即ち、真理・不真理と真実・不真実との原理的区別を正面から論ずる、という手順をとっているのである。ここに学位論文におけるシグワルトの要緊な位置が明らかである。シグワルトの名著『論理学』二巻は、「われわれの論理学の把握そのものは、……倫理的諸原理の、認識の諸原則に対する関係を規定せんとする、哲学の深甚なる問題を解決すべき課題を持っている。」<sup>(9)</sup>という言葉で結ばれている。ここにわれわれは、若きシェーラーが、カン・ト・オイケンの線上で体得した自己の哲学的関心を、シグワルト的問

題設定に沿って展開せんと試みていることを知ることができるのである。実際シェーラー自身、「哲学の深甚なる問題」という言葉を同意をこめて引用し、シグワルトを次のように評価するのである。「われわれは、シグワルトを一方では觀念論哲学、他方では自然研究・歴史研究との間の歴史的かつ事象的に拮抗した分裂を、この両者の思惟方向のうちに与えられている研究傾向を、真に有機的に織り上げることによって架橋せんとした唯一の人として特筆しても過言ではない。」<sup>(10)</sup>

かくて、シェーラーのこの問題に対する積極的見解の表明は、シグワルトの所論をめぐってなされることになるわけだが、彼のシグワルト批判は、オイケンも忠告したほど徹底したものだった。われわれは、シェーラーの「心情」の倫理学がいかにして成立したか、を知る上では是非共この批判をみておかなければならない。

## 二

論理と倫理の関係の問題に「哲学の深甚なる課題」を見い出すシグワルトは、従来の認識論的論理学が、理論的思惟のみを扱い行為に関わる思惟を忘却している、との反省に立ち主意主義的論理学を展開した。彼は、倫理学の礎石として「目的」概念を強調した。この限りではさし当り異とされまい。しかし、これをもって論理的原理をも基礎づけんとしたところに彼の独自の思想があった。その問題関心の斬新さ、綿密な業績の点で彼が一流の学者であったことは否定すべくもな

い。ヨードルも『倫理学史』で彼を、ドイツにおける学問的倫理学の新境地を開いた者と評価している。<sup>(11)</sup>

シグワルトは、理論的認識に関わる思惟すらも、意欲から規定されるところとした。従って真理もまた明証性の感情の権利から基礎づけられることになる。彼の学問論の特徴は、倫理的原理の側へと論理的原理を含みこませ、倫理的論理学という形で両原理を架橋せんとしたので、とみることができよう。

しかし、シェーラーは、右のようなシグワルトの「理論的領域」においてもまた、意欲が優位する<sup>(12)</sup>とする所説に多くの疑点を呈している。要点のみ記そう。①シグワルトの「意欲」概念は、理論的問題への関心、知識欲求をも含んでおり妥当でない。本来行為への欲求に限られるべきである。②彼の区別する二種の明証性、即ち、客観的—必然的思惟妥当性の明証性と、目的実現に関わる当為の明証性とは、判然とは区別しえないものである。③真理が感情や信仰に依存せしめられるならば、強度に従い等級を持つことになる。④国家意志が学問に浸透し、結局これを管理するに至るだろう。

とりわけ、⑤シグワルトは自ら自覚する循環論理の危険性<sup>(13)</sup>どころではない、一層深刻な循環論理に陥らざるを得ないだろう、という指摘はシェーラー自身の積極的主張をみる上で重要である。彼はすでに前半、哲学史の項でアリストテレス、デカルトについて循環論理を指摘していた。<sup>(14)</sup>「現代の一人の偉大な思想家」シグワルトの場合には如何

なる循環論理があるか。「一方では倫理的理想は必然的—普遍的に妥当する思惟から発生すべきであるのに対し、他方では、あらゆる真理への努力（従って倫理的理想の正当な認識への努力もまた）<sup>(15)</sup>は、常にその権利上、人間の倫理的規定から導かれるべきである」という、明白な倫理と論理、意欲と思惟との相互導来関係がそれである。

ではシェーラーはいかにしてこの循環論理を避けんとするのか。その唯一の策として彼は次のような選言命題を掲げる。「あらゆる倫理的理想は、必然的かつ普遍妥当な思惟に基づいており、いかなる場合にも思惟は自由に自己自身に立脚しており、従って、思惟の『権利』についてはもはや語りえないとする立場に立つか、それとも、倫理的なものは思惟を基礎づけえもしなければ、解消しえもしないとする、非合理的基礎の上に倫理的なものを立てる立場を選ぶか<sup>(16)</sup>」のいずれかしか循環論理を避ける道はない。前者は、徹底した倫理的合理主義であり、後者は感情倫理学である。シェーラーがいずれを選ぶかは明白である。すでに彼は、哲学史的回顧の部で、感情が理性の軛から解放されてきた経緯を好意的に辿っていた。哲学史の叙述は、論理的原理と倫理的原理（真理と真実）の把握の進展をパラレルに説き進めているが、このことを一応度外視し、感情的契機（行為に関わる思惟を含めて）のみに注目するならば、われわれは、キケロの *Prudentia*、ストア派の *Gelassenheit*、スコットス、オッカムの人間的理性ミターの信仰概念の深化、ハチソンの道德感覚、カントの実践理性の

優位等々に前進的意義を認める彼の眼差しに直ちに気がつく。これは、彼が倫理的リゴリズムを斥けようとする意図を抱いていることを何よりも明白に語っているのである。

かくてシェーラーは、感情倫理学の側に立つ。しかし、彼の立場は感情倫理学そのものか、という問題がある。なぜなら、イギリスの経験論的感情倫理学は、論理—真理の問題から身を遠ざける形で成立し、快・不快感情を重視するが、シェーラーは大陸の伝統に立つから、むしろその問題と積極的に関わりつつ、しかも、快・不快感情では説明できない「価値感情」を認めた上で、感情倫理学の方向へと舵をとったのであつてみれば、厳密には同じではないからである。とは言え、対立するものではむしろない。これについては、後にもとり上げるつもりである。更についでに言えば、では価値倫理学の立場かというところにも多少問題がある。何をもちて価値倫理学の本質規定とするかは難問だが、少くとも学位論文に限ってみるならば、「心情」をもつて倫理学の根本概念とみ、それなくしては倫理学が成立しない、先条件 *Vorbedingung* と語り、これと対応し、価値論よりは価値体験論に議論の比重をかけているからである。むしろ、この場合も、価値体験から独立した、客観的な価値の妥当性を認める立場は貫ぬかれている。とは言え主題の故もあろうが、十分なものとは言えず、価値の担い手がいかなる諸区分をなすかも判然としない。それ故、われわれは、学位論文においては心情が中心概念ではないかと解釈し、心情倫理学と

呼ぶのがより適切ではないかと考えるのである。これが感情倫理学と価値倫理学のいずれの特質をも備えていることは言うまでもない。これについても後にふれるであらう。

さて、シェーラーは非合理的な基礎の上に倫理的なものを立てる「心情倫理学」の立場に立とうとするわけだが、これによって循環論理はいかように避けられるのか。彼は論理的なものをどのように考えているのか。彼自身の学問観をみてみよう。

彼はシグワルトの各論点に逐次反駁する形で自説を対置する。彼にとっては、知的欲求 *Denkenwollen* は、行為に関わる傾動 *Streben* や衝動 *Trieb* とは全く別箇のものである。決して時空的衝動に依存しないで真理のみを目的とする。シェーラー自身は使っていないが、われわれはこれを、「理性的関心」(ヴァインデルバント) という言葉と近いものと解し得よう。思惟は動機点でかく純粹であるに加え、それ以後の思惟過程もまた、それ独自の合法的行程を辿る。即ち、矛盾律に従いつつ、普遍的—必然的妥当性の明証的意識に基づいて真か偽か判断してゆく。ここには、感情とか権利とかの問題は介在しない。事実として真なる命題の体系が作り上げられてゆくのである。むしろこの体系は、「一つの源泉から流出する」<sup>(18)</sup> フィヒテ、ヘーゲルのなそれではなく、カント的なそれ(ファイヒンガーは、最も天才的で同時に、最も矛盾に満ちた体系と形容したという)と考えられている。かくて徐々に出来上がつてゆく学問体系には、当の研究者のその都度の

主観的関心や、国家の意志などが入りこむ余地がないことになる。以上までの所論については、彼の次の言葉がよく裏付けていると思われる。「学問の本質は、ただ客観的真理への傾動のうちに存するのであり、伝達や教育は学問の本質には属さない。それらは、真理の価値 *Wahrheitswert* を増減しない。学問の立脚地、*Stand der Wissenschaft* は一定の時代に人間によって思惟されるあらゆる真なる判断の総計である。学問はあらゆる個々の研究者に對置している客観的事実であつて、彼はそれを分有するのである。」<sup>(19)</sup>

右によつてシェーラーが心理主義を斥け、言うなれば論理的リゴリストたらんとしていることがわかるが、このことは次のようなシグワルトの真理概念への批判と明証性把握への論駁で一層明白となる。シグワルトによつて、真理とは必然的―普遍的に妥当する思惟である。その場合の必然性は主観的―経験的なものではなく、思惟対象・思惟内容そのものに基づく客観的―論理的必然性である。では何がこの思惟必然性を保証するか。明証性の感情であり、さらにその権利への信念である。かかる意味で、あらゆる認識はわれわれにとつてのみ、或るもの *etwas* だ、ということになる。さてこれに對しシェーラーは、およそ「真理」概念について語るには、ある意識外的な *extramental* かつ超個人的な *überindividuell* 存在を仮定することを承認することなしには不可能だ、と考える。そして、意識におけるその所の与を「現実的对象」と名づけ、かかる対象と思惟との一致から真理概念を基

礎づけているのである。シグワルトはかかる存在を仮定しない。にもかかわらず、対象の本性に基づく客観的―必然的思惟があるとした。シェーラーに言わせれば、これでは「誤まり」を説明できず、一なせなら、「誤まり」の本質は、対象と思惟との不一致のうちにあるのではなく、現実的对象と思惟との不一致、即ち、誤まって表象された、かの存在、のうちにあるから―結局心理主義的な主観的真理観を脱し切れぬということになる。シェーラーは、意識所与の内部だけで真理概念を基礎づけようとしても不可能だ、と考えているのである。

次に、明証性の感情をめぐるシェーラーは二つのことを述べている。第一に、シグワルトが一つの同じものと考えている、判断の明証性と当為の明証性とは区別せねばならぬということ。第二に、シグワルトが明証性の意識を感情と呼んでいるが、これは判断については妥当せず、当為についてのみ妥当するのだ、ということ。第一の点について、シグワルトは認識論的論理学が忘却した、行為に結びつく思惟についても、そこに客観的な明証性があるとしたわけだが、シェーラーに依れば、これは、「倫理的なもの」の知 *Wissen* の明証性しか識別しておらず、倫理的―実践的課題としての当為それ自身の明証性を忘却していることを示すものである。ここでシェーラーは、倫理的生活においては、判断と結びついた価値感情が支配的であると考えているのである。第二の点について、真理を感情で基礎づけるならば、感情の質や強度の度合により、真理に等級が現出し、矛盾律に背くこと

になるだろう。等級があるのは実は、真理なる論理的次元においてではなく、真実 *Wahrhaftigkeit* なる倫理的次元においてである。

以上シェラーの真理観、学問観をみた。それは、倫理的なものから画然と分かつ方向であり、倫理的なものを学問的に取り扱うことの放棄である。倫理的なものに対する彼の眼差しは、全く非リゴリストのそれであり、若きシェラーは、人生や歴史のうちにいたるところ逆説や悲劇、イロニーを見い出すのである。<sup>(20)</sup>ヘーゲル哲学を「宇宙的政治学」と評する彼は、若きキェルケゴールが『イロニーの概念』を書いた時の気持に通ずるものを持っている。彼にとって、倫理的現象とは、知と感情とが意欲と結びついて行為となつて表出されるその全プロセスを指しているのであり、純粹に知的契機のみに留まりうる論理的現象とはちがうのである。しかるにシグワルトは、知のレヴェル（意欲に関する）に留まったからこそ、理論的なものの知の明証性と実践的なものの知の明証性とを同列に扱いうると信じたのであり、ここに二重の誤まり、即ち、倫理的なものにおける合理主義と、理論的なものにおける非合理主義とを犯すことになったのである。両分野を共に損うこの誤まりを避けるには如何にしたらよいか。言うまでもなく、両者を逆にすればよい。

かくてシェラーにとつては、論理的なものにおけるリゴリズムと倫理的なものにおける非合理主義とを選ぶことは、循環論理を避けうるのみならず、論理と倫理の両者を共に生かし、正しく架橋し、批

判主義を適切に継承する道である、と自覚されていることがわかるのである。

### 三

シグワルトの問題設定に照準を合わせ、倫理的原理をもって論理的原理を説明せんとする彼への批判を通じて、シェラーは自らの立場で両原理の関係を確定する視座を見出した。それは両者をきびしく分かつつも、それぞれ独立の意義を認めんとする方向だった。ここに、一方では論理的原理としての真理・不真理の問題に、感情や意欲という主観的なものを持ち込んでならぬし、他方では倫理的なもの（意欲）を真理・不真理をもって判定してならぬ、という主張がなされるのである。われわれはこの二つの主張のうち前者については、すでにみた彼の学問観・真理観——それに従えば、ある判断や命題の真・偽は、明証性の感情をもってそれを意識する主体の側によって左右される事柄ではなく、対象とその判断との客観的な関係の規定である。真なる関係が、真なる判断に先立っている。真と確信される偽なる命題、確信のもてぬ真なる判断がありうるのであって、真理自体とその受容とは別箇のものと考へねばならない。この混同から、真理の等級なる相対主義が帰結することになるのである。——から概略を知った。そこで次に後者の、倫理的問題に関するシェラーの見解をみてみよう。

この問題は、実践的—倫理的真理としての「真実」Wahrhaftigkeitをいかに基礎づけるか、という問題である。彼はこれを嘘言論に焦点をあてて論じている。一般的に言って、嘘言とは、偽によって他人を誤りに導き、欺き害う悪しき行為であり、不真理かつ不真実の両特性が属している。けだしこの点においてシェーラーの問題展開において格好のテーマであろう。彼は先ず哲学史を回顧し、諸々の嘘言論を検討する。ギリシャの *pseudos* 観、アウグスチヌスの *mendacio* 論、トマス、ルター、グロチウスの不真実論がその素材となる。彼はそれらのうちに、むろん個々の相異は措くとして、一貫して「嘘言とは不真理を語るることによって人を害うものである」とする定義が流れ続いているのを見てとっている。彼は、この定義に多くの疑義を抱く。①この定義の根底には、不真実を不真理から、従って、真実を真理から基礎づけんとする考え方があり、という点。シェーラーにとって、真理と真実の相互導来関係はない。「真理を表現すること必ずしも真実ではなく、逆に、不真理を表現すること必ずしも不真実ではない。」②この定義は、嘘言を、広く言って不真実を、「語る」という表出活動に限定して考えているが、実はそうではない。不真実は「単に表出の特性であるのみならず、思惟それ自身の特性である。」③不真実は、他人にのみ向けられるものではなく、実は自己自身へも向けられるものである、ということ。④嘘言は、必ずしも他人を害うものではない、従ってそのことから嘘言を排斥する論拠は見い出せない。等々。一体

かような主張をなしうる根拠をシェーラーはどこに見い出しているのであろうか。彼にとって、真実・不真実の問題を、真理・不真理の問題から区別し説明づける概念は、「心情」*Gesinnung* である。彼は「心情」をもって、シグワルト的な「信念」の領域をも新たに画定し直そうと図るのである。そこでわれわれは、シェーラーの「心情」概念を検討し、彼がいかにこれに基づいて、右の不真実論を、そして一般に倫理的問題に関する思想を正当化せんとしているか、を考察しよう。

シェーラーは、真と思ひ確信する主観的信念の存在を排除せよという方向でシグワルトを批判したわけではないし、まして、一切の確信の等級が虚妄であると主張したわけでもない。逆である。倫理的現象をまさにそこにはかないものとみなしている。彼は、かかる主観的評價領域に該当するものを「心情」と呼ぶのである。彼が「心情」概念を簡潔に定義づけているわけではないが、全体としてそれは、信念・確信・思慮 *Besinnung*・感情等の意味合いを含み(論理的な思惟 *Denken* や私念 *doxa*、*Meinung* の意味合いは含まない)、実践生活における知情意の三活動を統一づける根源的活動原理として語られている。シェーラーのみるどころ、現実の生活にみられるものは、何らかの価値感情と結びついた知的活動、何らかの価値感情に原因する意欲、それらの表現としての価値評価的判断ならびに行爲である。これらを総合する魂の全体的活動、これが「心情」なのである。むろん、「学問」においては、かかる心情は排されねばならない。学問は、没価値



的に客観的真理を思惟において受けとめ、命題化し体系化していかなければならない。そこに学問の進歩もある。しかるに、倫理的なもののかかる学問から範をとってはならない。倫理的なものにおいては、およそ進歩なる概念は妥当せず、むしろ安定性こそが望ましい。シェラーは、その都度の学問的真理から、倫理的原理が導かれる時、そこにはエートスの類魔が招来すると考えているのである。この時彼の念頭には自然淘汰説から、優性保護・弱者切捨てなどの社会政策が導かれたら一大事だというような実例があったのかもしれない。ともあれ、エートスの問題に関する限り、「心情」を抜きにしては成り立たないと彼は考える。「心情なしには、あらゆる倫理性 *Stitlichkeit*、あらゆる非倫理性 *Unstlichkeit*、従って一般に倫理的現象は確実に不可能である。」「倫理学にとっては、心情概念は根本概念として役立つ。なぜなら行為一般が倫理的評価の領域に入ってくるのは、その行為が心情から発する意欲によって惹き起されている限りにおいてだからである」<sup>(23)</sup>。

以上によって、「心情」の抽象的規定と、倫理学におけるその中心的位置づけを見た。そこで、その具体的な諸特性を順次みていくことにしよう。

先ず「心情」は、心理的事実としては知的判断と価値感情との、「生きた総合」によって発生してくる、という点について。

「価値」概念について彼は、ロツツェを受けつぎ「妥当性」 *Geltung*

ととらえる。価値は、あらゆる個人的私念や願望から独立し、客観的に「妥当」する。価値妥当性は決して存在する事物ではない。感情を介して体験 *erleben* されるのである。かかる価値体験をシェラーは価値感情と名づける。では、価値感情の本質はどこにあるだろうか。

ここで前節で触れた感情倫理学か否かの問題に再び関わってくる。彼は、価値感情を決して心理主義的に、即ち、快・不快、適意・不適意の感情をもつては基礎づけえないものとみる。これは後のシェラーにも一貫している。すでにこの点において、ロツツェをも離れてしまっている。ロツツェは、シェラーのみるところ、いまだ感情倫理学的立場に留まり、快感情を積極的価値感情に、不快感情を消極的価値感情に結びつけて理解していたからである。シェラーは、快と消極的、不快と積極的、という対応の事例を認め、そこに、快・不快感情と価値・反価値感情とを明確に区別すべき一つの根拠をみている。他の根拠もある。そのうち本質的なものは、感情の客体に関してである。「快・不快は、感覚や知覚、それらの再生産及び空想的心像と結びつく。それに対し、価値感情は常に直接に概念や判断と結びつき、それらの関係する諸対象とは間接にしか結びつかない。」<sup>(24)</sup> 快感情は直接に対象と、価値感情は直接に概念や判断と結合する、というこの識別は、価値感情が深く内面的なものであり、魂の全体即ち心情とかかわっていることを物語っている。シェラーは、かかる価値感情が、心理的事実として発生してくるのは、一定の判断内容と一定の普遍的感

情とが「生きた総合」によって結びつけられるからだ、と説明する。われわれはこれを次のように解釈できよう。実践生活の中でわれわれが行う諸々の知的活動とその都度それに結びついた感情との複雑多岐な相関の中から、一定の關係がしばしば、かつ強く意識されるに至るとき、その關係は魂の全活動の中核に迫ってくるであらう、実はこのことは、その關係がより心情的になつてきたのと全く同じ意味ではないか、と。むろん、これは事実として説明すればの話であつて、原理的には、価値妥当性が先なるものであつて、心情において感得されるのは後なるものである。

以上から、二つのことが引き出される。一つは、価値感情との結びつきを欠く、純粹な知的判断（学問においては、これが生命である）、また知的判断との結びつきを欠く、純粹な価値感情（前述の価値感情の定義からしてこれも背理した仮定であるが）なるものは何ら心情的でないから、いずれも倫理的現象ではない、という事である。両契機がまさに心情において結びつき、行為となつてあらわれるところに倫理的現象の本質徴標がある。故にシェーラーは、それを問わない現象を *unter-ethisch* もしくは *außer-ethisch* な現象と名づけるのである。他の一つは、知と感情との結びつきには強さ・弱さなどの度がある、ということである。これについては、第二の特性として述べよう。「心情」には、その質・強度によつて等級があることをシェーラーは指摘する。その等級の高低を規定するものは、ある感情・ある判断が

魂の全体的複合体といかにかかわっているか、ということである。このかわりをシェーラーは心理的事実として四側面から考えている。

①ある意識内容が生存中に意識される量的側面。従つて一つ覚えの事柄も心情的に信じうる。②意識内容の強さ。一時的な体験も内容の強烈さによつて、魂に深い影響を及ぼす。③ある意識内容が、他の意識内容を連想せしめる量的側面。これは①を複合的にみたものである。

④連想内容が一定であるという、場合の数。これはある意識連想の頻度数の如きものと解される。これら四側面からみてある意識内容が高い数値を示すならば、その意識はいよいよ魂の全体に根を下ろしてゆき、高度の心情的等級をもつに至る。瞬時的に知覚される意識内容は（質を問わない場合）、この全体とはほとんど關係し得ぬから何らの心情の支えも欠く。かかる意識に発する表出活動は、心情現象ではないから非倫理的現象であると言えよう。これに対し、ある判断・行為が魂の全体を根拠としてなされているならば——この場合、それと対立する判断・行為に敵対し、魂をそこから孤立化させることが極めて強くなる——、いわばそこには、人格がかけられているから、単なる知的対立ではなく心情的・人格的対立が起つてくることにもなる。相手を理解できないからではなく、理解しようとしなから理解しないといった場合が多いのはこのためである。

さてシェーラーは心情の等級を魂の全体的複合体にかかわってくる意識内容の質・量二側面から規定するが、むろんこれは、心理的事実

として説明し得ると考えてのことではなく、原理的に言うならば、価値感情が先なるものなのである。従って、その根拠からすれば、意識量が多くなるから、より心情的になってくるのではなくて、逆なのである。このことは、前述の価値感情の発生の問題と同じく、シェラーの反心理学主義のあらわれである。

心情の特性は以上の二特性に尽きるものではない。その内容については、なるほど学問の場合の如く変化発展するといったものではないが、決して不変なものではなく、相対的に一定のものである、ということ。更に、それは単に個人についてのみならず、世代についても、従って歴史についても考えなければならない、ということ。(ここには明白にリッケルトの影響が認められる。)等々。しかしここで大事な点は、シェラーがかかる「心情」をもって倫理的なものの本質徴標とみていること、そして、真理と真実、不真理と不真実との原理的区別づけの問題に「心情」なる基礎概念を提起することによって彼なりに結着をつけようと考えていることである。

シェラーは「真実」を次のように定義する。真実とは、客観的に真とみなされる判断を、心情的にも信じていること、すなわち、明証の感情によって主観的にも確信していること、および、この確信が表出されること、である。<sup>(25)</sup>この定義の含むいくつかの側面をとり出してみよう。

まず、真実問題が、真理問題との直接的結びつきを解除され、心情

から説明されていることが明らかである。前節でもみたように、真理は主観的信念から独立している。確かに主観によって「真とみなされ」てはじめて真理認識は成立するが、かかる主観は理性的関心をもち、没価値的態度をとる意識一般の如きものである。これが決定的役割を果たすのは学問においてである。しかし実践的眞現たる真実が問題となるときには、価値感情たる心情が決定的役割を果たす。ここにおいては例えば、真理を話すことではなくて、真理と信じたことを話すことが真実なのである。心情の支えの有無が、客観的真・偽よりも重要である。それ故、不真実もまた、単に、偽を話すこと、などではなく客観的真理を心情的に確信し切れなくなった、知と信との分裂現象として説明されることになる。

かくてこそ、前述の定義で、判断面と表出面とに分けた所以も理解されよう。即ち、不真実とは、単に外面的行為のみについて言われるものではなく、また単に「他人に対して」という形でのみ存在するのではなく、心情の支持を欠くに至った思惟という形で内面的判断にもつきまとってくる、従って「自己に対して」も存在する、人間にとっての本来的特性なのである。

かくてシェラーは、われわれのみるところ、真実・不真実の問題には決して原則的リゴリズムを貫き得ないものと考えているのである。心情は等級をもつから、行為が心情に由来するか否か、即ち、真実か不真実の二者択一は無意味である、ということもその重要な理

由である。しかし、一層本質的理由は、歴史をみ、社会をみ、自己をみれば、真実を貫ぬくことが不可能であり、むしろ不真実が人生につきまものと観察せざるを得ない、ということである。彼は特殊な不真実の形成諸例を挙げてゐる。知と心情との分裂が世代的に起る啓蒙期の悲劇的不真実。民族的な不真実。自己自身に対する、内的・外的不真実。心の動きをそのまま表出する卒直 Offenheit は、必ずしも真実ではなく、逆に秘めること・隠蔽することが真実である事例。これらを彼自身の言葉で概括すれば、「行為の動機……に着目すれば、真実を生き<sup>(25)</sup>尽くし、不真実に陥ることのない者は誰一人、ない。」

かくてシェーラーは、勇気を元徳とする徳論を展開する。けれど、あらゆる行為、また判断ですら勇気を必要とするからである。疑うことは悪である。生に徹すれば、不真実に陥ることがあろう。結果に対する確実知はそもそも不可能であつて、結果倫理は成立しないのである。心情に従つて生きることが最高の倫理的目的であつて、これなくしては倫理的現象はありえず、従つてこのことこそが倫理学の先条件なのである。以上が、倫理的問題に対するシェーラーの見解である。

## 四

「学位論文」におけるシェーラーの思索の中心点は、倫理学とは論理的なものに関する学問ではなく、心情に關しての価値意識の批判だ、

という把握に集約されよう。それは学問を範としてはならない。なるほど心理学とは深くかわるが、それに終始せず、客観的に妥当する価値ともかわつてゐる。この両性格から、倫理学は、心理学の成果を踏まえたアクシオロジーである、とシェーラーはとらえていたと推察される。むしろ、いくつかの不十分な点も観取される。「学位論文」は心情を重視する彼の関心が生のまま吐露されており、未だ方法的自覚が十分なされていないこと、価値規準に従つて心情の善悪を規定する価値論的把握が十分展開されていないこと(この故に、価値倫理学というよりは心情倫理学だ、とわれわれは前に述べた)、心情の歴史性、即ち価値意識の内容の社会的変化が、言及されているが、体系的ではない、等々。

むしろ、これらの問題は「学位論文」の直接の主題でなかったわけであり、今一つシェーラー自身が自己に与えていた課題、即ち、倫理と美、倫理と美との原理的關係づけの画定、という課題とも合わせ、その後のシェーラーの哲学的思索のテーマとして残ったものであろう。これらを跡づけることは、われわれの今後の課題である。

## 注

- (1) Max Scheler, Frühe Schriften. Gesammelten Werke Bd. 1
- (2) Frühe Schriften, S. 69 (☉) ibid. S. 13 (✱) ibid. S. 68
- (5) ibid. S. 12, S. 14 (☉) ibid. S. 59 (〜) ibid. S. 14
- (8) ibid. S. 95 (☉) Sigwart, Logik. Bd. 2 Aufl. S. 796.

- (10) Frühe Schriften, S. 69 (11) F. Jodl, Geschichte der Ethik. Bd. 2, 3 Aufl. S. 528 (12) Sigwart, Logik. Bd. 2, S. 26
- (13) ibid. S. 759 (14) Frühe Schriften, S. 19 (15) ibid. S. 76
- (16) ibid. S. 80 (17) シェーラーの用語に従えば、感覚やそれら否々を問わず、客観的に妥当する価値自体に関する理論は Axiologie とはいわれ、これに対して価値体験に関する理論は Wertungstheorie と語られるべき。尚 Werttheorie という言葉は使われていない。
- (18) Frühe Schriften S. 82 (19) ibid. S. 79 多少途中を省いて引用した。(20) ibid. S. 28, 69, 70, 128 (21) ibid. S. 141
- (22) ibid. S. 94 (23) ibid. S. 114, S. 95 (24) ibid. S. 100
- (25) ibid. S. 151 註出 (26) ibid. S. 158